

仏教の環境観について

文学部 竹村牧男

キーワード：器世間、唯心思想、娑婆即浄土、自他不二、
利他行

1 仏教の身心と環境の見方

環境という言葉は、もともと日本語にあったのか、外国語の訳語として造語されたのか、私は詳しくは知らないが、仏教の用語に、環境という言葉はないと思う。しかし「器世間」(bhajana-loka)という言葉はあり、この「器」という語は、環境という語に親しいと思われる。なお、環境には一般に、自然環境のみでなく、社会環境や文化環境などが言われうるが、仏教の器世間には、基本的に物質的な環境、つまり自然や都市などの意味しかない。

仏教では、一個の衆生の身・心は、器世間に置かれて生きていと認識しており、器世間の問題をけって無視してはいない。衆生(sattva)とは、有情、心を持つ者のことで、いわば植物を除く生物であり、その存在は、

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上(神々)・声聞・縁覚・菩薩・仏

という10種類(十界)があるとされるが、それぞれ固有の器世間において生存することになる(一処四境、いわゆる一水四見参照)。

六道輪廻という言葉があるように、これらの世界は、業の結果として存在するものである。そこで、業の果報ということで、身・心(いわば個体)を「正報」と呼び、器世間を「依報」と呼ぶ。また、たとえば、三種世間という言葉がある。それは、衆生世間・国土世間・五蘊世間というものであるが、これは、世界は色・受・想・行・識の五つの物質的・精神的諸要素(五蘊)の複合体であるという見方(五蘊世間)の中で、それがさらに衆生と国土とに現成すると見たものである。したがって、本来、五蘊世間は実法(実質的に存在するもの)であり、衆生世間・国土世間は假法(実質性をもたず、実質あるものの上に仮に立てられたもの)であるということになる。このように仏教では、身・心と器世間、正報と依報、衆生と国土とは、常にセットとして捉えられている。

さて、人間が住んでいる世界は、人間界であるが、この世界は娑婆世界(サハ一。忍土)であって、苦しみの多い世界だと認定されている。そこで、穢土であるとも言われる。もちろん、前の十界の、下に行くほど苦しみは大きく、上に行くほど楽しみが多くなる。苦しみや楽しみは、地獄や天

上の記述のように、感覚的に説明される。『俱舍論』によれば地獄には、八大地獄（八熱地獄）があるという。今、その名称のみあげてみると、等活地獄・黒繩地獄・衆合地獄・号叫地獄・大叫地獄・炎熱地獄・大熱地獄・無間地獄である。源信の『往生要集』がそのありようを詳細に紹介していることは、有名である。他に、八寒地獄なるものも言われたりしている。

一方、仏はその国土、仏国土に住しているわけで、我々からすればその国土こそ、いわば実現すべき理想世界ということになる。三世十方の諸仏の仏国土の様子は、ほぼ同じようなものであるようである。一例に阿弥陀仏の浄土（仏国土）、極楽の様子は、『無量寿経』では次のように説かれている。

「その仏の国土、自然の七宝、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・磲磈・碼碯、合成して地となし、恢廓曠蕩にして限極すべからず。ことごとく、雑廁し、うたた入間す。光赫焜耀にして、微妙奇麗なり。清浄の莊嚴、十方の一切世界に超踰す。衆宝の中の精にして、その宝、なお第六天の宝のごとし。また、その国土には、須弥山および金剛鉄圍、一切の諸山なく、また大海・小海・溪渠・井谷なし。仏の神力のゆえに、見んと欲せばすなわち現す。また、地獄・餓鬼・畜生の諸難の趣なし。また四時の春・秋・冬・夏なく、寒からず熱からず、常に和ぎ調い適す。……」

また、その国土、七宝のもろもろの樹りて、あまねく世界に満つ。金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・磲磈樹・碼碯樹なり。……栄色の光耀たること、勝げて視るべからず。清風、時に発りて、五つの音声を出だし、微妙の宮商、自然相和す。……」

なお、この極楽浄土のあり方をまとめて示すと、およそ次のようなことが言われている。

- 1) 極楽は西方に位置する（しかも無限の距離を隔てている）。
- 2) 地獄・餓鬼・畜生などが存在しない。
- 3) 日・月・星辰がなく、暗黒がない。
- 4) スメール山（須弥山）等もなく、大海もなく、平坦である。
- 5) 池・泉または河があり、水は欲するままにある。
- 6) 七宝で樹木が飾られている。
- 7) 宝樹が風に吹き動かされて、快い音を出す。
- 8) 風が吹くと、地面は香り高い美しい花で敷きつめられる。
- 9) 神と人間との区別はなく、他化自在天のようである。
- 10) 一切の享受がそなわっていることは、他化自在天のようである。等等（藤田宏達『原始浄土思想の研究』、岩波書店、1970年、442頁以下参照）

ちなみに、下記『大日経』に説かれる法身仏の浄土を見ても、基本的に同様のようである。ともあれ以上が、仏が完成した国土の内容なのであるが、要は、まったく苦のない快適な世界として描かれているということであろう。しかしここでの楽は本来、宗教上の解脱等がその内容になるはずである。

もちろん、地獄等における苦もその意味の中で捉えられるべきであろう。それはいったい何を意味しているのか、現代的な解説が必要である。宗教上の苦・楽、とりわけ仏教的見地に立った苦・楽から解釈すれば、楽は生死の苦しみを超えた地平に立ち、真の意味での自由が実現した世界であり、苦は生死の問題に解決を得ていない状況ということになる。そこでこのことを環境世界のあり方との関連において、再解釈していく必要がある。

2 環境浄化への基本的姿勢について

さて、仏教においては、我々は器世間に対し、どのように対すべきだと考えられていようか。

まず、阿弥陀仏の極楽に往生して救われようという浄土教では、この人間界を仏国土に変えていくべきだとは考えられていないと言わざるをえない。厭離穢土・欣求浄土という言葉があるように、この世における生存と可能性に絶望を抱き、極楽浄土にひきとってもらうことが、我々の救いだと考えている。したがって、この人間世界にかかわり、とりわけ器世間そのものを改造・発展させていこうという発想は、そこにはないものと思わざるをえない。(ただし真宗にいう、往相・還相の還相〔浄土往生のちに浄土から娑婆に還ってくる〕においては、この世界の環境改善へのはたらきも、何らか含まれるのかもしれない。)

一方、同じ仏教でも、たとえば法華経系では、この世にこそ実は久遠実成の釈迦牟尼仏がいるのであり、この世界がそのままその仏国土・靈山浄土にほかならないという思想を有している。本来はそのような世界なのだけれども、凡夫の眼は煩惱にさえぎられてそのことが見えないでいる、というのである。『法華経』「如来寿量品」には、次のようにある。

「然るに善男子よ、われは実に成仏してより已来、無量百千万億那由他劫なり。……われ成仏してより已来、またこれに過ぎたること、百千万億那由他阿僧祇劫なり。これより来、われは常にこの娑婆世界にありて、法を説きて教化し、亦、余処の百千万億那由他阿僧祇の国においても、衆生を導き利せり。……かくの如く、われは、成仏してより已来、甚大久遠なり。寿命は無量阿僧祇にして、常に住して滅せざるなり。」

このように、久遠実成の釈迦牟尼仏は、常に娑婆世界に住していると明かされている。ということは、実はこの世界はその久遠仏の仏国土にほかならない、ということになるわけである。この後の重頌(重ねて詩形式で説明するもの)には、次のようにある。

「衆生を救わんがための故に、方便して涅槃を現わすも、しかも実には滅度せずして、実にここに住して法を説くなり。」

われは常にここに住すれども、諸の神通力をもって、顛倒の衆生をして、近しと雖もしかも見ざらしむ。……

神通力かくの如し、阿僧祇劫において、常に靈鷲山、及び余の諸の住処に在るなり。

衆生の、劫尽きて、大火に焼かると見る時も、わがこの土は安穩にして、天・人、常に充滿せり。

……

わが浄土は毀れざるに、しかも衆は焼け尽きて、憂怖・諸の苦悩、かくの如き悉く充滿せりと見るなり。……

諸有の、功德を修し、柔和にして質直なる者は、則ち皆、わが身、ここに在りて法を説くと見るなり。」

したがって、この世で修行すれば、その浄土が見えてくることになるであろう。ということは、修行によって心が浄化されることに伴って、自分の住む器世間が浄土化していくということである。しかしながら、この立場にあっては、本人にとってはそうなったとしても、他の煩惱を抱えたままの凡夫には、自分の住んでいる世界はやはり浄土には見えず、浄土とはならないと思われる。

このように仏教においては、ある人がその人の住む世界の転換を目指したとしても、基本的にそれはその修行者個人の問題となり、普遍的に人間界の環境を変えていくことにはならない構造になっている。仏教では、ほぼ環境世界の物理的な改善を考えてはいないようなのである。環境に直接、関与していこうという発想はないので、たとえ環境世界が壊れていくほどに危機を迎えたとしても、それは人間世界ないし宇宙そのもののおのずからの行方と見なすのみなのかもしれない。

参考までに、個人が生死輪廻していくように、宇宙は、おのずから成・住・壊・空を繰り返すと考えられている。『俱舍論』によれば、それぞれ、二十劫の時間を経過するという。そこを、成劫・住劫・壊劫・空劫と表現する。住劫の間には、人間の寿命が、八万歳と十歳との間の増減をおおよそ20回、繰り返すとされる。増加していく際も減少していく際も、百年に一歳分のみ変化するのである。この増減一回の過程を一小劫といい、住劫には全部で二十小劫あるわけである。もう少し詳しくいうと、第一小劫は八万歳から十歳に減ずるのみである。第二小劫から第十九小劫までは、それぞれ増減がある。第二十小劫では、十歳から八万歳へと増加するのみである。最初の第一劫では、業力が強くて容易に減ぜず、最後の第二十劫では、業力が衰えて容易に増えない。そこで、二十小劫の各期間は同じ時間となるという。そして他の成劫・壊劫・空劫の期間も今の住劫と同じ二十劫(=二十小劫)の時間を経過するのだというのである。なお、人間の寿命が十歳になると、刀兵・疾疫・飢饉の災害が起きる。そこで人々は目覚めて、徳義を重んじ、正しい道を歩むことになる。そうすると、また寿命が増加していくという。

壊劫においては、まず地獄の器世間が壊れ、地獄の有情は餓鬼界に移る。ついで餓鬼の器世間が壊れ、餓鬼の有情は畜生に移る。こうして、次第に向上していった欲界・色界等の器世間、つまりいわば眼に見える環境世界はすべて壊れていくが、その壊れる際には火・水・風の災害が起きるとされ、さらに壊劫がすべて終るときにも、幾多の災害が起きるとされている。

空劫は、壊劫のあと、成劫の微風が起り始めるまでの空虚な世界の間である。成劫にいたって、次第に世界が形成され、やがて天上に上っていた有情もそれぞれの世界に降りてくるという。詳しくは、深浦正文『俱舍学概論』などを参照されたい。ともかく、この説明によれば、環境世界の成・住・

壊・空のプロセスは、既定の路線どおりおのずから進行していくかのようである。

というわけで、仏教の関心は、そうした環境世界を人間の力で変えていこうとするのではなく、むしろ個人個人、修行して、心を浄化してくことで、自分の住む国土も浄化し、その中で理想のいのちのありかた（自利利他円満）を実現していくことにある。公の環境世界よりも自己に関心が集中しているといわざるをえないであろう。ここには、心が浄化されれば、環境も浄化されるという考え方があ

る。実は大乘仏教の菩薩は、心の浄化の修行とともに、自分の住む国土を浄化していく修行（浄仏国土。仏国土を浄める）をしていくとされるのであるが、その浄仏国土の修行には、自分が住む世界に住む他の人々等の心を浄化させていくことが含まれている。むしろ肝心なのは、こちらのほうであり、そのことを通じて、その人々等に、よりよい環境が実現されることを目指しているのである。ゆえに環境に直接、関与するより、他者の心に関与していくのである。もちろん、業果としてそこに生まれた環境世界（依報）に対し、その界のあり方の制約の限りにおいて、よりよい環境に改善するよう行動することがありえないわけではないに違いない。しかし力点は、そこにはない。これが、従来の仏教のあり方の実情である。

3 心の中の環境世界という視点

なぜ心が浄化されると、環境世界も浄化されるのであろうか。主客相関、物心相関のあり方は、縁起の関係などからもいえるかもしれないが、このことをはっきりと説明するのは、唯識思想であろう。唯識思想においては、意識下に第七識・第八識を立てるが、その第八阿頼耶識の中に、不可知の器世間と身体があるという。もっとも根源的な心の中に、身体と環境が維持されていて、そこにおいて見たり聞いたり考えたりがなされている、その全体が一人のいのちだというのである。我々が知っている身体や環境は、主に五感を通して感覚されたものであって、その元になる身体と環境は、不可知であるが、阿頼耶識の中にあるとされている。このとき、人人唯識と言って、一人一人八識で、その数だけ器世間があることになるが、人間界に生まれた者同士は、人間界に共通の器世間をそこに現じている。こうして、身・心と環境世界をセットとして、そこに一個のいのちがあるという見方になる。そうした中で、心を浄化していけば、生死輪廻の中でよりよい環境に生まれえ、このとき阿頼耶識の相分（身体と環境等）も輪廻の中でよりよい世界となっていくのである。

唯識の立場に立てば、こうして、身・心と環境世界が一つであることは簡単に説明がつくことになるが、他の思想的立場でも、このことが説かれることは少なくない。華嚴思想における仏の捉え方を見てみると、三世間融合の十身仏だとされている。それは、『華嚴経』「十地品」に説かれている、「衆生身・国土身・業報身・声聞身・辟支仏身・菩薩身・如来身・智身・法身・虚空身」に基づくものである。今、それらの個々の詳しい説明は省略するが、その意味は、仏という一箇の存在は、「その仏自身と・その仏が住む国土と・そこに住むあらゆる人々のすべて」を包含した存在だということであ

る。すなわち、この智正覚世間・国土世間・衆生世間の三世間（前の三種世間とは異なる概念の三世間）が融合しているのが、華嚴の十身仏であり、毘盧遮那仏であると説くのである。このことは、仏だけでなく、一個の衆生（生き物）の存在の内容は、その者自身と・その者が住む国土と・そこに住む他のあらゆる衆生のすべてを包含したものであることを物語っているであろう。

なおこの思想の基盤にも、唯識（唯心）思想があるものと考えられる。『華嚴経』には、「三界は虚妄にして、但だ一心の作なり」（『華嚴経』「十地品」）とか、「心は工みなる画師の如く、種々の五陰を画き、一切世界の中に、法として造らざる無し。……」（同「夜摩天宮菩薩説偈品」）とかの句もある。

このほか、天台宗では、しばしば依正不二（環境と身・心の不二）を説いている。これは、すべてが空・仮・中の三諦（3つの真理）のあり方にあり、すなわち無自性にして縁起しているあり方の中で、相即・互具しているという見方によるものであろうし、やはり根底に唯心論的世界観があるものと思われる。というのも、天台宗の究極の教えは、一念三千にあるといわれるが、これは一念の中に、前の十界（地獄から仏まで）の、それも各界の衆生世間・国土世間・五蘊世間の三種世間等があるという見方であるからである。この場合、一念の中に五蘊があり、それは衆生世間（この場合はある者の個体を意味しよう）と国土世間（その者の住む世界）がある、という見方が基礎になっていると思われる。そこを基礎として、不二・互具を見る立場から、関係性がさらに広がるわけである。詳しくは、十界が互いに具するので、十×十で百界となり、そのおのおのに三種世間を見（三百世間）、しかもそのおのおのに十如是を見る（三千如是）ということになって三千の数字が出、この三千のすべてが一念にあるというのである。

4 娑婆即浄土の思想について

というわけで、主に唯心・唯識の立場から、身・心と環境世界は別のものではないことが主張されるが、一方で、前に見たように、この世界は本来、浄土であるとの見方もあるのであった。『法華経』による天台宗では、靈鷲山が存在するこの世界は実は仏のいます浄土であると主張することになる。今の天台宗の一念三千の思想は、このことを理論化しようとしたものと見ることができるであろう。それによれば、人間界にも仏界が含まれていることになる。つまりこの世界に仏の世界がある、この世界は仏の世界とも変わらない、という見方が出てくることになる。穢土即浄土、この娑婆世界が本来、仏国土であるということになるのである。

このことの論理的表現の一つは、これまでたびたび紹介してきたように、天台宗における「草木国土悉皆成仏」の議論の中に見ることができる。この句は日本の天台宗の教学研究の営みの中で作られたと考えられ、ゆえに日本的な思想と考えられているものである。この思想の背景にある哲学・論理について、たとえば天台宗の忠尋（1065～1138）作と伝える『漢光類聚』（実際には、1250年ころの作らしい）には、まとまった形で示されている。そこには、「……草木成仏に七重の不同有り。一、

諸仏の観見、二、法性の理を具す、三、依正不二、四、当体の自性、五、本より三身を具す、六、法性の不思議、七、中道を具す。中道とは、一念三千、草木も亦た闕かざるが故に云う」とあり、七種の理由から、草木成仏ということが言われうるとするのである。これらについては、何回か紹介したので、もう全部については述べないが、たとえば「四、当体の自性」に関しては、次のようにある。

「第四に、自己の本性そのものにおける成仏とは、どんなものであれ、そのものの当体は仏なのである。仏とは、覚りの智慧のことだからである。国土であれ衆生であれ五蘊であれ、そのすべての本性は、それ自身（空性であるがゆえに）常住で、煩惱を離れていてその本質は変らない。その清浄なるところを、仏というのである。草木成仏というのは、草木が仏のしるしとされる三十二相八十種好を実現するという事ではない。草木の根・茎・枝・葉は、それぞれそのままに、その清浄なる本性そのものを、成仏というのみである。」

これによれば、「草木の根・茎・枝・葉は、それぞれそのままに」仏であることを、「草木国土悉皆成仏」の句は表しているのだという。このことは、「二、法性の理を具す」、「五、本より三身を具す」、「六、法性の不思議」、「七、中道を具す。（一念三千による）」においても共通の立場であろう。ゆえに「草木国土悉皆成仏」の句は、「草木国土も成仏できる」という意味よりも、「草木国土は悉皆、成仏している」という意味にとるべきものである。要は、我々の住む環境は、本当はすでに仏国土だということである。

参考までに、天台本覚法門の一つの文献『三十四箇事書』（『枕雙子』）の「草木成仏の事」は、次のように説いている。「草木は依報、衆生は正報なり。依報は依報ながら、十界の徳を施し、正報は正報ながら、正報の徳を具す。もし草木成仏せば、依報減じて、三千世界の器世間に減少あらん。故に、草木成仏は巧に似るとも、返つて浅に似たり。余も、これに例す。……常住の十界全く改むるなく、草木も常住なり、衆生も常住なり、五陰も常住なり。よくよく、これを思ふべし。」この考え方によれば、草木はすでにそのまま常住（成仏）なのであり、その意味ではむしろ草木不成仏（あらためて成仏することはない）だというべきだということである。

このように、人間世界の環境世界も仏を本体としているとの思想は、空海の密教にも示されている。一例に、『吽字義』には、「常遍の本仏は、損せず虧せず。汗字の実義は、汝等応に知るべし。水外に波無し、心内即ち境なり。草木に仏無くんば、波に則ち湿なけん。彼れに有つて此れに無くんば、権に非ずして誰ぞ。……三諦円涉にして十世無礙なり。三種世間は、皆なこれ仏体なり。四種曼荼（大曼荼羅・法曼荼羅・三摩耶曼荼羅・羯磨曼荼羅）は、即ち是れ真仏なり。汗の実義 応に是の如く学すべし。……」とある。

『即身成仏義』にも、「是の如くの六大は能く一切の仏、及び一切衆生、器界等の、四主発心と三種世間とを造す」「此の如きの経文はみ皆な六大を以て能生と為し、四法身・三世間を以て所生と為す。この所生の法は上、法身に達し、下、六道に及ぶまで、粗細隔有り、大小差有り」と雖も、然れども猶六大を出でず、故に仏、六大を説いて法界体性と為したもう。諸の顕教の中には四大等を以て非

情とす、密教にはすなわちこれを説いて如来の三摩耶身とす。四大等心大を離れず、心色異なりと雖も、その性即ち同なり。色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。能所の二生有りと雖も、都て能所を絶せり。法爾の道理に何の造作か有らん。能所等の名は皆なこれ密号なり。常途浅略の義を執して種種の戲論をなすべからず」等とある。ここにいう六大とは、実は本不生・出過語言道・諸過得解脱・遠離於因縁・空等虚空・覺といった、仏の体性のことなのである。

また、『声字実相義』では、声境のみでなく五境のすべてが言語でありうることを「五大に皆な響有り、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり、法身は是れ実相なり」と説き、そこで色境（色塵。顕色・形色・表色）が言語でありうることを、「顕形表等の色あり、内外の依正に具す、法然と随縁と有り、能く迷い亦た能く悟る」の頌（詩）で示す。ここに、法然とあるのは、すでに本来、環境は仏国土として成立していることを意味するものである。そのことを経典（『大日経』）は次のように表現している。「爾（そ）の時に大日世尊、等至三昧に入りたもう。即時に諸仏の国土地平なること掌の如し。五宝間錯し、八功德水芬馥盈満せり。無量の衆鳥あり。鴛鴦鶯鶯和雅の音を出す。時華・雜樹敷榮し間列せり。無量の樂器自然に韻に諧い、その声微妙にして人の聞かんと樂う所なり。……」さらに、この法仏法爾の身土を、衆生の側からみたときは、次のように説かれている。「若し衆生辺に約して釈せんこと亦復た是の如し。若しは謂く、衆生に亦た本覚法身有り、仏と平等なりといわば、此の身、此の土は法然の有なるのみ。」我々凡夫の身・土も、本来は法爾の仏身・仏国土であるのが真実であるというのである。

このほか、禅宗の道元もまた、『正法眼蔵』「山水経」において、「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり」と説いている。山水は仏として説法しているというのである。ただしその山水は、対象的存在ではなく、主客未分のいのちの中で現成しているものである。また、同「仏性」の巻には、「いま仏道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆえに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆえに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。草木国土これ心なり、心なるがゆえに衆生なり、衆生なるがゆえに有仏性なり。日月星辰これ心なり、心なるがゆえに衆生なり、衆生なるがゆえに有仏性なり。国師の道取する有仏性、それかくのごとし」と説いている。なお、道元の仏性とは、「悉有」のことであり、さらにその「悉有」とは、「それ透体脱落なり」と言われるようなものである。つまり、道元にとっては、主客の枠組みを超えた地平において、本来のいのちがはたらくところが、仏性なのである。

ちなみに、華嚴宗は自らの思想的立場を、前に述べた天台宗よりも勝れているのだと主張する。天台宗は同教一乗（別教一乗に同等の一乗。なお、三乗に相対的な一乗）であるが、華嚴宗は別教一乗（同教一乗も超えた一乗。なお、三乗と一体的な一乗）なのだと主張するのである。その論点には種種のことがありうるが、とりわけ仏土の見方において典型的に現われている。たとえば法蔵の『華嚴

五教章』には、「或いは釈迦の報土は靈鷲山に在りと説く。法華經に云うが如し、「我れ常に靈鷲山に在り」等と。……故に法華を説く処、即ち実と為すなり。菩提樹下にして華嚴を説く処を蓮華藏十仏の境界と為すが如く、法華も亦た爾なり。漸く此れに同ずるが故に、是れ同教なり。然も未だ彼の処を即ち十蓮華藏及び因陀羅等と為すと説かざるが故に、別教に非ざるなり」（「所詮差別」第九摂化分齊）とある。天台宗（法華）は靈鷲山即報土、つまりこの娑婆世界がそのまま覺りを完成した仏の住む仏国土であると認めており、きわめて高度な見方を示しているが、華嚴宗では、さらにその世界が重重無尽の縁起の世界であることをも明かしている。このことを明かしえていない天台宗の立場は、華嚴宗より低いものとなる、と主張しているわけである。その両者の高低・深淺はともかく、華嚴宗もまた天台宗とともに、この世がそのまま浄土であることを主張していることになる。

というわけで、仏教の多くの立場では、この我々人間が住む娑婆世界がそのまま仏の国土であるのだと説かれていることを見た。それは、より抽象的に言えば、現象即實在、相對即絶對、現實即眞實、という立場であり、思想的にはおのずから到達すべき一つの地平でもあるのである。

5 仏教の環境観とサステナビリティの問題

以上、仏教においては、

- ①身・心の個体と環境は常に組において捉えられており、その全体が一つのいのち（自己）と見られていること、
 - ②両者は不二であり、むしろ唯心的に一つであること、
 - ③両者ともに業果として現成するものであること、
 - ④それゆえ業を改善していけば（心を浄化していけば）環境はよりよいものとなること、
 - ⑤実は人間界の環境でも、本来はすでに仏界の環境であることが本来の事実であること、
- などが説かれていることを見てきた。

さて、以上の「仏教の環境観」は、サステナビリティを追求する立場に対して、どんな意味を有していると考えられようか。以下、多少なりとも、その意義をくみ取ってみたい。

第1に、自己と環境の不二の關係の了解により、より事実・眞實に即した自己観・自然観への変化が期待できる。そこには、何よりも「己事究明」を主題とする宗教・哲学として、本来の自己のあり方が教えられるという根本的な意味がある。また、環境も自己であるという了解は、環境の痛み・苦しみは自己の痛み・苦しみであると感じ取り、その改善へとはたらくことになるであろう。もちろん、我々は他の動植物のいのちを奪い、自然環境を開発するなど、さまざまに環境を利用していかなければ生きていけないが、ことさらに侵害・破壊は極力慎む方向を導くであろう。

第2に、人間世界の環境が実は仏国土であることの理解もまた、自己を含めての自然等への深い畏敬の念と尊重の念を導き、やはり自然環境へのことさらに侵害・破壊は極力慎む行動をもたらし、む

しろそこにあるはずのあらゆる徳（仏徳）を実現させていくことにもなろう。キリスト教でも、最近「エコシステムをもったこの世界は「神のなか」に存在している。……神は世界のプロセスのすべて「のなかで、とともに、のもとで」現存している。それゆえ、神の存在と創造活動の側面から、世界のプロセスに対しては尊敬と畏敬の念が求められ、また価値づけがおこなわれるのだ」（イギリスの指導的な国教会の牧師・分子生物学者のアーサー・ピーコック『神の創造と科学の世界』）と、神を内在的に見て、この世界を神聖視する立場も現われているという。こうした新たな神学の傾向に対し、間瀬啓允は、「純粋な宗教的回心の目覚めの基礎には、創造の秘儀への畏敬と尊敬の念がある。世界をつくったのはこの〈私〉ではない。……こうした〈恩寵、恵みのセンス〉によって環境世界に対する〈私〉のかかわりの〈転心〉＝意識の変革がでてくるのだ。……回心した者の自然に向かう態度はエコロジカルである」（『エコロジーと宗教』、岩波書店、1996年）と解説しているが、仏教でも同じことを見出すことが可能であろう。

第3に、心の浄化が、生死輪廻の中の業果として、よりよい環境を招くという、多少、非現実的な説に関しても、やはり現世においてであれ、貪りや怒り等々を超越していくことにおいて、その人自身に楽が実現し、ひいては環境世界も調ってくるという意味合いを汲むことができるであろう。今日の地球環境問題の解決のためには、やはり人間のあくなき欲望の抑制、とりわけ先進国の消費のあり方の見直しは必要であると思われるが、このことに関して、心の浄化は真の意味での楽をもたらすということの意味・内実を、仏教に謙虚に学ぶことがあってもよいのではないかと思われる。

第4に、上にはあまりふれなかったが、仏教では、自己は他者とも不二と見ており、あらゆる他者は自己であると見ている。したがって、自他を苦しめる共通の問題の解決に取り組むべきとの姿勢は、当然、成立してくる。このとき、環境問題に直接、関与して積極的に改善を図っていくべきことも、おのずからのこととなる。なるほど業果としての人間界は、その人間界としての基本的あり方を変えられないのかもしれない。しかしその限りにおいて、共通の世界をより良いものに改善していくことは可能である。（たとえ唯識、人人唯識で器世間は個々の阿頼耶識にあったとしても、ある人が自分の家の庭の木を切り倒したとき、他のあらゆる他人の阿頼耶識内の器世間に影響（増上縁）をおよぼし、それぞれに現に見えていたその木は切り倒されることになる。）このとき、仏教の自他不二の他者には、未来の他者も含まれるから、その他者のためにも今日の問題に積極的に関与していくべきことが、この仏教の思想から成立することになる。このことは、サステナビリティの問題にもっとも根底で関わるものであろう。

以上をまとめると、次のようである。

- ①自己と環境の不二の関係の理解に基づく自己観・自然観の変化による自然環境への姿勢の改善。
- ②環境の仏国土性の理解による、自然環境尊重への根本姿勢の確立。
- ③心の浄化が自然の徳の顕現につながることを理解による、環境倫理、ライフスタイルの方向性の明

確化。

④自己と他者の不二の関係の了解による、世代間倫理の基盤への理解の促進。

6 具体的なライフスタイルの指針について

以上から、さらに具体的なライフスタイルのあり方を打ち出していくとすれば、どのようなものになるだろうか。このとき、まずは仏教で説いてきた修行の徳目が参考になるかと思われる。では、それはどのようなものであろうか。ここで、簡単に概観しておこうと思う。

まず、在家仏教徒のための五戒は、「不殺生・不偷盗・不妄語・不邪淫・不飲酒」である。次に、在家・出家を合わせての初期の大乗戒は、「不殺生・不偷盗・不邪淫・不悪口・不妄語・不綺語・不両舌・無貪・無瞋・不邪見」の十善戒である。この内容は、

- ・殺さない・盗まない・邪な男女関係をもたない（＝身の行為）
 - ・粗暴な言葉を言わない・うそをつかない・飾り立てた言葉を使わない・仲たがいをさせる言葉を言わない（＝言葉の行為）
 - ・食らない・怒らない・間違った見方をとらない（＝心の行為）
- といったものである。

さらに、大乗仏教との修行の基本である六波羅蜜として、「布施（恵む）・持戒（慎む）・忍辱（耐える）・精進（努める）・禪定（落ち着く）・智慧（観じる）」が説かれている。

このほか、下記のような修行が説かれている。

・三十七菩提分法

四念処（身・受・心・法について、不浄・苦・無常・無我と観察する）

四正勤（未生の悪を生ぜざらしむ・已生の悪を滅せしむ・未生の善を生ぜしむ・已生の善を増せしむ）

四如意足（欲・精進・心・思惟）

五根（信・勤・念・定・慧）

五力（五根の増長）

七覚（摂法・精進・喜・軽安・捨・定・念）

八正道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）

・四摂事（布施・愛語・利行・同事）

・四無量心（慈・悲・喜・捨）

以上、ほぼ修行の徳目（名目）のみあげてみたが、この中、大乗仏教徒にとってもっとも基礎的かつ重要な修行は六波羅蜜である。それについてはやや詳しい解説を、私なりにわかりやすくしてこ

ここに掲げてみよう。『摂大乘論』に出るものである。

「布施の三種とは、一に法施、良き教えを一人占めにしないで、皆とわかちあうこと。二に財施、お金や品物を人々に恵むこと。三に無畏施、無畏の心を施すこと、人の不安を取り除いてあげることである。

持戒の三種とは、一に律儀戒、諸の悪をなさないこと。二に摂善法戒、進んで諸の善を修行すること。三に饒益有情戒、人々を利益していくことである。

忍辱の三種とは、一つに耐怨害忍、誹謗中傷を受けても堪え忍ぶこと。二に安受苦忍、夏の暑い日、冬の寒い日でも我慢して修行すること。三に諦察法忍、真理を明らかに観察することとしての忍（認）である。

精進の三種とは、一に被甲精進、物事を成就するためには、まずは固い決意をもって入っていく。二に加行精進、さらに努力精進を重ねていく。三に無怯弱無退転無喜足精進、ひるむことなく退くことなく少しの成果では満足することなく、どこまでも修行を続けていく。

静慮（禅定）の三種とは、一に安住静慮、安楽に住する境地が開ける禅定の世界がある。二に引發静慮、これは神通力が生まれるというのである。坐禅を修行していると、遠くの離れたところのことが見えたり、聞こえたりするようになる。三に成所作事静慮、衆生利益のため、飢饉・病疫などを禅定によって滅すること。坐禅に入れば、飢饉や伝染病を止めることができるらしい。

智慧の三種とは、一に無分別加行慧、これは無分別智を起すために修する智慧。二に無分別慧、無分別智そのもの。三に無分別後得慧、無分別智の後に得られる分析的な智慧である。」

仏教では、基本的に心の浄化が環境の浄化につながるとの見方を示していたのであった。上述の修行は、すべてその心の浄化になんらかつながっていることであろう。ただし、大乘仏教の修行のまず最初に、布施があげられていることの意味は少なくないに違いない。そこには、我執・法執とともに断っていくという意味もあるが、やはりそれ以上に財産や知識、技能など、持てるものを分かち合せて、自他の具体的・実質的な平等性を現実に実現していこうとする精神に裏付けられている。なぜこのことがすべての修行の出発点に置かれているかということ、元来、大乘仏教においては、仏の側から、自己は他者と不二・平等であることの自覚を恵まれ、そこに眼を開いて、そこを原点に生きていく決意を固める（発菩提心）ことから始まるものであるからなのであろう。しかも、その布施の中、もっとも重要なことは、無畏の心を施すということであろう。他者の不安や恐怖の解消にはたらいていくことが、まず求められているのである。次の持戒にしても、単に禁止規定を守るだけでなく、積極的に善を行い、さらに饒益有情ということを心がけるべきだという。この基盤の上に、忍辱・精進がおのずから志向されることになり、同時に、禅定と智慧という、覚（自覚覚他）をめざす仏道にとってもっとも核心的な止観行の修行が遂行されていくという設計になっている。

なお、この六波羅蜜、そして三十七菩提分法のほかに、四摂事（四摂法ともいう）と四無量心の修行があげられることも、無視・軽視すべきではないと思われる。四摂事でも、まずは布施があげられるのであり、ついで愛語・利行（利他行）とある。最後の同事とは、相手に同化しつつも自らの善の実践を堅持して相手を自己に同調させていくことのようなのである。

いずれにしても、これらの行は、利他の実践ということになる。一般に、小乗仏教の修行は、戒・定・慧の三学によって説かれるのに対し、大乘仏教で六波羅蜜を唱えたということは、他者との関係を配慮したからであると言われる。もちろんそのことは、精進は共通の徳目として、布施と忍辱に見ることができる。我々はこの主題が採り入れられていることの意味を、もう一度、真剣にふりかえるべきではなかろうか。

しかも大乘仏教の世界観からいって、利益すべき他者としては、同時代の眼に見える者のみでなく、同時代の見知らぬ他者や、さらに未来の時代の見知らぬ他者まで含まれるべきことはいうまでもないであろう。縁起は、空間的のみならず、時間的にも広がっているはずだからである。ここに、サステイナビリティを追求するライフスタイルの手がかりも見いだされてくるとされる。

修行というと、少欲知足を心がけるとか、どこか禁欲的で自己否定的なものと思われやすい。しかし大乘仏教の修行は、もとより自己の向上のみをめざすものではなく、自己は他者と不二・平等であることの自覚を恵まれる中で、その不二・平等の関係に沿った自他の実現を自らの課題としていくことなのである。その原点に基づいて、生きていく方向を定めることなのである。そのとき、物質的であれ、精神的であれ、負を負う者に対しては正に転じさせるべくはたらくことが求められてくる。その平等の関係の実現への実践なしに仏道修行はなく、そこに人間の本来のあり方が示されていることを思うべきであろう。

なお、唐突ながら、もう少し時代に即した具体的な指針として、ディーブ・エコロジーを唱えたアルネ・ネスが示したライフスタイルの一つの典型は、参考になると思われるので、ここにあげておきたい。

- ①質素な手段を用いる。
- ②反消費主義をとる。
- ③民族的・文化的な違いの価値を理解し、これを尊重する。
- ④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする。
- ⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする。
- ⑥自然のなかで生きることを心がけ、利益社会ではなく共同社会の発展に努める。
- ⑦すべての生きものの真価を認め、これを尊重する。
- ⑧身近な生態系の保護に努める。
- ⑨人間が飼う動物と競合する野生生物を保護する。

- ⑩非暴力などに基づく行動をとる（同時に肉食主義に向かう）。
- ⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準であまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす。
- ⑫どこでも、だれにでも実現可能な生活のあり方の真価を理解し、これを尊重する。このようなライフスタイルとは、他の人々や人間以外の生きものに対しても、不正を働くことなく維持できる可能性を持つ生活のあり方である。（「ディープ・エコロジー運動の支持者に見られる傾向の指摘」、ネス「ディープ・エコロジーとライフスタイル」（1983）、アラン・ドレングソン・井上有一共編、井上有一監訳『ディープ・エコロジー——生き方から考える環境の思想』、昭和堂、2001年、93～94頁）

こうしたものを参考にしつつ、具体的な倫理やライフスタイルの指針を打ち出していくことが望まれるが、このことは、今回の「環境観」を超えるので、さらに別の機会に考えてみたい。また、個人のライフスタイルを考えるのみでなく、やはり社会組織・制度およびその運営についても、改革の構想を具体化していかなければならないことはいままでもない。ここに、人文科学と社会科学の統合という課題が横たわっている。

それにしても、特に仏教の場合、今後、心の浄化のみでなく、自他共通である現実の地球環境世界の改善への関与（環境デザインから環境保護・維持・改善へ）への道を、いかに導くかが、切実で深刻な、大きな課題であることを自覚すべきであろう。